

虫 笛

北方領土とアラゲヒラタキクイムシ

かつて筆者は本誌に、日本から記録のあるヒラタキクイムシ科全6種（その後1種追加して7種、また未発表の1種があるので現在は総勢8種）の生態と分布の総説を発表した（岩田, 1988）。ここで筆者は、そのうちの1種アラゲヒラタキクイムシ *Lyctoxylon dentatum* (Pascoe) について、「Iablokoff-Khnzorian (1976) は千島列島における（本種の）分布の可能性を指摘しているが、気候的にまず無理であろう」と記した。結論から言うとこの記述は、北方領土問題における日本と旧ソ連・ロシアにおける意識の違いを如実に浮き彫りにしており、極めて興味深い問題を提起している。しかしこれはこの総説の論題からは逸脱することにて、その場では詳しくコメントすることは差し控えた。今回はこの問題について触れてみたい。

この種、アラゲヒラタキクイムシの日本からの記録は、今から約130年前にオーストリア・ハンガリー帝国（現、チェコ領）に住む著名な甲虫学者 Reitter (1878) が、その首都ウィーンの博物館所蔵の Hiller 氏の日本産標本をもとに、*Lyctoxylon japonum* として新種記載（同時に英領インド東部からも記録）したものが最初であり、その後この種はベルギーの女流甲虫学者 Vrydagh (1958) によって、記載年代のより古い *Lyctoxylon dentatum* (Pascoe, 1866)（模式産地は Xulla: 現インドネシア・モルッカ諸島）のシノニムとされ、爾後本種にはこの Pascoe (1866) の学名が与えられている。

本来この種は、ここで登場する産地国名（インド、インドネシア）から見てわかるように熱帯系の昆虫で、日本での分布地は本州（関東・中部地方以西）・四国・九州・石垣島であり（岩田, 1988; 1994）、石垣島での分布を除き、他の若干の日本産ヒラタキクイムシ科の種と同様、南方由来の外来種の位置づけとなる（岩田, 2005）。当然本種の東北地方以北における分布は気候的に無理であり、実際記録・発生例は見られない。

筆者は大学院生時代、ヒラタキクイムシ科各種の世界的分布を調べる過程で、当時のソビエト連邦・アルメニア（現、アルメニア共和国）の甲虫学者 Iablokoff-Khnzorian (1976) の著したソビエト連邦のヒラタキクイムシ科のロシア語による総説に接し、これを辞書を片手に解読していったが、そこで冒頭に紹介した *L. japonum* に関するはずれな記述に、その論文の最後で出くわしたわけである。Iablokoff-Khnzorian はテントウムシ科の大著 (1982) を著すなどして、旧ソ連の甲虫学の大御所であったが、「北方四島をソ連が実効支配しているのでこれをその版図に入れることはとりあえずは致し方ないとしても、この熱帯性のアラゲヒラタキクイムシが亜寒帯の千島列島に産するなんてありえず、大御所もとんだミソをつけたものだ」と、当時私は苦笑いしたものである。しかしそこで私は、あることにハタと気がついたのであった。

北方領土、すなわち南千島2島、色丹島、歯舞諸島の帰属問題は戦後の日本外交における一貫した大問題である。あのような広大な領土をかかえていた旧ソ連、そしてその大部分を冷戦終結後継承しているロシアにとっては、あの北方四島など実にちっぽけな存在で、しかも終戦のドサクサで不可侵条約を破って攻め入って南樺太・北千島とともに占領したという経緯もあり、あの「辺境」の四島ぐらいいは返してもらってもいいではないか、というのが日本の国民一般の偽らざる心境・世論であろう。しかし旧ソ連、現ロシア政府ともになかなかこれに応じようとしない。これは結局はロシア国民の国土観とそれに基づく世論に根ざしているというのが、そのとき私が気づいた点であった。ロシアがあのような広大な領土を獲得していったのは、15世紀以降の一貫した版図拡張政策によるが、とくに18世紀以降の拡張は「不凍港」、すなわち海面が凍らない港を求めてのことで、領土拡張政策には面積のみならず気温および制海権という要因が動機としてからんでいる。

とくにより暖かい土地を希求する寒冷地民族たるロシア人の心情は、日本人には理解しがたいほどのものであろう。その目には、北方四島（これは日本人の眼で見ての話であり、彼らにとっては「南方四島」!）は、その全版図中で最暖地の一つ、すなわち日本人にとっての沖縄のような土地との位置づけとなり、人によっては常夏の島というイメージが伴っているものと思われる。そうなればそう簡単に返すわけにはいかない。

筆者は寡聞にして Iablokoff-Khnzorian という方の民族的帰属を知らないが、“-off” (=“-ov”) はロシア人を含む東スラブ人の、“-ian” はアルメニア人の苗字の語尾である。したがってこの方も恐らくは旧ソ連国民一般と同様、北方四島を「かけがえのない暖地」という眼で見ていたはずで、Reitter (1878) の論文を読んだ上で、「南千島は本州と同じぐらいに暖かい土地なのだから、本州に分布するアラゲヒラタキクイムシは南千島にも当然分布しているはず」と考えてしまったのであろう。しかしこれは実状からはかけ離れていることは言うまでもない。

北方領土問題はこのような国土観の相違とその相互理解の行き違いがもとで、いつまでたっても解決を見ない悲劇であり、この行き違いははからずも、このように家屋害虫の生物地理学的記述に誤謬を生ずる形で露呈しているのである。

引用文献

- Яблоков-Хнзорян, С. М. [Iablokoff-Khnzorian, S. M.] (1976) Жесткокрылые-Древогрызы СССР (Coleoptera, Lyctidae). [The powder-post beetles of USSR (Coleoptera, Lyctidae).] *Академия Наук Армянской ССР, Институт Зоологии, Зоологический Сборник [Academy of Sciences of Armenian SSR, Institute of Zoology, Zoological Papers]*, **17**: 87-100.
- Iablokoff-Khnzorian, S. M. (1982) Les Coccinelles: Coléoptères-Coccinellidae. Société Nouvelle des Éditions Boubée, Paris.
- 岩田隆太郎 (1988) 日本産ヒラタキクイムシ科の分類および各種の分布と生態特性について. *家屋害虫*, (35/36): 45-54.
- 岩田隆太郎 (1994) アラゲヒラタキクイムシの九州における発生. *家屋害虫*, **16**(2): 98-99.
- 岩田隆太郎 (2005) 日本産ナガシクイムシ科ヒラタキクイムシ亜科 7 種の分布の性格付け: 自然分布種か移入種か. *甲虫ニュース*, (149): 9-12.
- Pascoe, F. P. (1866) List of the Colydiidae collected in the Indian islands by Alfred R. Wallace, Esq., and descriptions of new species. *Journal of Entomology*, **2**(9): 121-143, pl. 8.
- Reitter, E. (1878) Neue Cucujidae des königl. Museum in Berlin. *Verhandlungen der Kaiserlich-Königlichen Zoologisch-Botanischen Gesellschaft in Wien*, **28**: 185-199.
- Vrydagh, J.-M. (1958) Contribution à l'étude des Bostrychidae. 11. Les Bostrychidae de l'Australie, de la Tasmanie et la Nouvelle-Zélande. *Bulletin & Annales de la Société Royale d'Entomologie de Belgique*, **94**: 35-64.

(日本大学生物資源科学部 岩田 隆太郎)